

ほくぎ 北魏・511年 / ていどうしょう 鄭道昭 (? ~ 516)

(教科書 52・53 ページ)



概要・特徴

中国 北魏の官僚であった鄭道昭が、父・鄭義の功績を後世に伝えるために雲峰山の岩壁に刻した銘文であり、鄭道昭の^{まがい}摩崖(天然の岩肌に刻された銘文)の書を代表する名品である。はじめは天柱山の高く険しいところに刻したが、後に雲峰山の中腹に場所を移し、再び刻した。前者を「鄭義上碑」、後者を「鄭義下碑」という。上碑は文字の損傷が激しいが、下碑は現在でも全文がほぼ完全な姿で伝わっている。

各文字は空間を包むようにゆったりと大回りに運筆し、点画には丸みをもたせている(^{えんせい}円勢)。伸びやかで力強く、原石の長年の風化も相まって素朴な趣がある。

作者について

^{かなん}鄭道昭(? ~ 516)は、北魏の官僚で、河南省の名門貴族の出身である。学芸を好む慎重で深い人柄であったという。^{こうしゅうし し}光州刺史(山東省の地方長官)としての在任中、山東半島に連なる雲峰山・天柱山・^{たいぎ}太基山などに多くの摩崖を刻した。

「鄭義上碑」「鄭義下碑」の他に、「^{ろんけいしよ し}論經書詩」(雲峯山)、「^{せんだん し}仙檀詩」(太基山)、「^{とうかんせきしつ}東堪石質銘」(天柱山)などがある。これらは「牛橛造像記」などの「^{ほうせい}方勢」の書に対して、「^{えんせい}円勢」の書の典型として位置づけられている。

時代背景

北魏は、北方民族によって建国された、北朝最初の王朝である。この時代、造像記や摩崖の書、石碑、墓誌銘(石などに文章を刻んで墓の中に納めたもの)などに、独特の力強い書風の楷書が多く刻された。それらの豊富な刻石資料は、後世に注目され、人々に大きな影響を与えた。

一方、南朝(^{そう せい りょう ちん}宋・齊・梁・陳)は、政治的にも文化的にも、^{とうしん}東晋の伝統を受け継いだ王朝である。貴族文化が栄華を極め、書においては、^{おうぎ し}王羲之・^{おうけん し}王献之によって高められた技法が継承された。南朝では立碑が禁じられたことから、刻石資料は僅かである。